万葉歌の〈乱〉字の全ての読み方について

間宮厚司

はじめに

『万葉集』の全歌の中に、〈乱〉字は五七首中五八例ある。そのうち、次の短歌一首のみは、〈乱〉字を〈間乱〉と表記して、二文字でマユヒと読まれている。

今年行く新防人（にひさきもり）が麻衣（あさころも）肩のまゆひ〈間乱〉は誰（たれ）か取り見む　（万葉七・一二六五）

そして、新日本古典文学大系『万葉集』（岩波書店）では、当該歌の脚注で、「まゆひ」について、次のように解説する。

「まゆひ」は、織物の糸が乱れ、片寄り、破れそうになること。「白たへの袖はまゆひ（間結）ぬ」（二六〇九）。「まよひ」とも言う。

一方、新編日本古典文学全集『万葉集』（小学館）は〈間乱〉を「まよひ」と訓じ、次のように頭注で述べる。

まよひ―織物の布地がすり切れかけたり、縦糸・横糸が歪み片寄ったりする意の動詞マヨフの名詞形。

このマユヒとマヨヒは、ユとヨの母音交替形で、どちらかに決めるのは難しい。

また、上の一二六五番歌以外の〈乱〉字については間宮厚司［二〇一二］で、動詞のミダル・マガフ・サワクと訓じられることについて考察した。ただし、そこでは〈乱〉字の全歌例を提示せず、部分的に論じたため、本稿では万葉歌の〈乱〉字を用いた全例を提示して、総合的に考察したい。

なお、ここでは原則として、本文と訓読文は新日本古典文学大系『万葉集』（岩波書店）に従うが、訓読文のルビについては適宜省略し、原文表記は〈　〉内に入れることにした。

一　ミダルと読む歌

最初に、『万葉集』で〈乱〉字をミダル（四段と下二段の両活用あり）と読む歌であると、本稿の筆者が判断した全歌①～㊶を以下に列挙しよう。

①人皆は今は長しとたけと言へど君が見し髪乱れたりとも
〈乱有等母〉　（万葉二・一二四）

②…引き放つ　矢のしげけく　大雪の　乱れて来たれ〈乱而来礼〉…　（万葉二・一九九）

③飼飯の海の庭良くあらし刈薦の乱れて出づ見ゆ〈乱出所見〉海人の釣船　（万葉三・二五六）

④こもりくの泊瀬娘女が手に巻ける玉は乱れて〈玉者乱而〉ありと言はずやも　（万葉三・四二四）

⑤我妹子に恋ひて乱れば〈恋而乱者〉くるべきに掛けて搓らむと我が恋ひそめし　（万葉四・六四二）

⑥否と言はば強ひめや我が背菅の根の思ひ乱れて〈念乱而〉恋ひつつもあらむ　（万葉四・六七九）

⑦我が聞きにかけてな言ひそ刈薦の乱れて思ふ〈乱而念〉君がただかそ　（万葉四・六九七）

⑧朝髪の思ひ乱れて〈念乱而〉かくばかりなねが恋ふれそ夢に見えける　（万葉四・七二四）

⑨名児の海の朝明のなごり今日もかも磯の浦廻に乱れてあらむ〈乱而将有〉　（万葉七・一一五五）

⑩今日もかも沖つ玉藻は白波の八重折るが上に乱れてあるらむ〈乱而将有〉　（万葉七・一一六八）

⑪庭つ鳥鶏の垂り尾の乱れ尾の〈乱尾乃〉長き心も思ほえぬかも　（万葉七・一四一三）

⑫然とあらぬ五百代小田を刈り乱り〈苅乱〉田廬に居れば都し思ほゆ　（万葉八・一五九二）

⑬彦星のかざしの玉し妻恋に乱れにけらし〈乱祁良志〉この川の瀬に　（万葉九・一六八六）

⑭…ぬばたまの　髪は乱れて〈髪者乱而〉国問へど　国をも告らず…　（万葉九・一八〇〇）

⑮…闇夜なす　思ひ迷はひ　射ゆししの　心を痛み　葦垣の思ひ乱れて〈思乱而〉…　（万葉九・一八〇四）

⑯別れてもまたも逢ふべく思ほえば心乱れて〈心乱〉我恋ひめやも　（万葉九・一八〇五）

⑰青柳の糸の細しさ春風に乱れぬい間に〈不乱伊間尓〉見せむ児もがも　（万葉一〇・一八五一）

⑱我がかざす柳の糸を吹き乱る〈吹乱〉風にか妹が梅の散らむ　（万葉一〇・一八五六）

⑲…むら肝の　心いさよひ　解き衣の　思ひ乱れて〈思乱而〉…　（万葉一〇・二〇九二）

⑳白露と秋の萩とは恋ひ乱れ〈恋乱〉別くこと難き我が心かも　（万葉一〇・二一七一）

㉑ますらをの思ひ乱れて〈念乱而〉隠したる妻天地に通り照るとも顕はれめやも　（万葉一一・二三五四）

㉒うちひさす宮道に逢ひし人妻ゆゑに玉の緒の思ひ乱れて
〈念乱而〉寝る夜しそ多き　（万葉一一・二三六五）
㉓山菅の乱れ恋のみ〈乱恋耳〉せしめつつ逢はぬ妹かも年は
経につつ　（万葉一一・二四七四）
㉔解き衣の恋ひ乱れつつ〈恋乱乍〉浮き砂生きても我はあり
渡るかも　（万葉一一・二五〇四）
㉕ぬば玉のわが黒髪を引きぬらし乱れてなほも〈乱而反〉恋
ひわたるかも　（万葉一一・二六一〇）
㉖解き衣の思ひ乱れて〈思乱而〉恋ふれどもなぞ汝がゆゑと
問ふ人もなき　（万葉一一・二六二〇）
㉗妹がため命残せり刈り薦の思ひ乱れて〈念乱而〉死ぬべき
ものを　（万葉一一・二七六四）
㉘我妹子に恋ひつつあらずは刈り薦の思ひ乱れて〈思乱而〉
死ぬべきものを　（万葉一一・二七六五）
㉙息の緒に思へば苦し玉の緒の絶えて乱れな〈絶天乱名〉知
らば知るとも　（万葉一一・二七八八）
㉚玉の緒の絶えたる恋の乱れなば〈乱者〉死なまくのみそま
たも逢はずして　（万葉一一・二七八九）
㉛片糸もち貫きたる玉の緒を弱み乱れやしなむ〈乱哉為南〉
人の知るべく　（万葉一一・二七九一）
㉜み吉野の水隈が菅を編まなくに刈りのみ刈りて乱りてむと
や〈将乱跡也〉　（万葉一一・二八三七）
㉝うらぶれて離れにし袖をまたまかば過ぎにし恋い乱れ来む
かも〈乱今可聞〉　（万葉一二・二九二七）
㉞解き衣の思ひ乱れて〈念乱而〉恋ふれども何の故そと問ふ
人もなし　（万葉一二・二九六九）
㉟み吉野の秋津の小野に刈る草の思ひ乱れて〈念乱而〉寝る
夜しそ多き　（万葉一二・三〇六五）
㊱玉の緒を片緒に搓りて緒を弱み乱るる時に〈乱時尓〉恋ひ
ざらめやも　（万葉一二・三〇八一）
㊲恋ふること増される今は玉の緒の絶えて乱れて〈絶而乱
而〉死ぬべく思ほゆ　（万葉一二・三〇八三）
㊳白たへの袖の別れは惜しけども思ひ乱れて〈思乱而〉許し
つるかも　（万葉一二・三一八二）
㊴玉かづら幸くいまさね山菅の思ひ乱れて〈思乱而〉恋ひつ
つ待たむ　（万葉一二・三二〇四）
㊵…葦垣の　思ひ乱れて〈思乱而〉　乱れ麻の〈乱麻乃〉　麻
笥をなみと…　（万葉一三・三二七二）
㊶…取り束ね　上げても巻きみ　解き乱り〈解乱〉　童にな
しみ…　（万葉一六・三七九一）

なお、右のように新日本古典文学大系『万葉集』（岩波書店）で、〈乱〉字をミダルと訓読している歌でありながら、筆者の判断により、改訓したものについては、本稿の「二　マガフと読む歌」と「三　サワクと読む歌」において検討を加える。

二　マガフと読む歌

続いて、『万葉集』で〈乱〉字をマガフ（四段と下二段の両活用あり）と読む歌と判断した全歌ア～コを列挙し、その後で問題歌を検討する。

ア…大船の　渡の山の　黄葉の　散りのまがひに〈散之乱尓〉　妹が袖　さやにも見えず…　（万葉二・一三五）

イ秋山に落つる黄葉しましくはな散りまがひそ〈勿散乱曾〉　妹があたり見む　（万葉二・一三七）

ウ矢釣山木立も見えず降りまがふ〈落乱〉雪につどへる朝楽しも　（万葉三・二六二）

エ秋萩の散りのまがひに〈落乃乱尓〉呼び立てて鳴くなる鹿の声の遥けさ　（万葉八・一五五〇）

オ我が岡に盛りに咲ける梅の花残れる雪をまがへつるかも〈乱鶴鴨〉　（万葉八・一六四〇）

カ梅の花枝にか散ると見るまでに風にまがひて〈風尓乱而〉雪そ降り来る　（万葉八・一六四七）

キ川の瀬の激ちを見れば玉かも散りまがひたる〈散乱而在〉川の常かも　（万葉九・一六八五）

ク…下枝に　残れる花は　しましくは　散りなまがひそ〈落莫乱〉…　（万葉九・一七四七）

ケ阿保山の桜の花は今日もかも散りまがふらむ〈散乱〉見る人なしに　（万葉一〇・一八六七）

コ…もみち葉の　散りまがひたる〈散乱有〉神奈備の　こ　の山辺から…　（万葉一三・三三〇三）

右のア～コの万葉歌が、〈乱〉字をマガフと読む例である。ところで、新日本古典文学大系『万葉集』（岩波書店）では〈乱〉字をミダルと訓じている歌例であるのに、マガフの訓に筆者が改めたのは、次のカ・キ・ケの三首である。

カ梅の花枝にか散ると見るまでに風にまがひて〈風尓乱而〉雪そ降り来る　（万葉八・一六四七）

キ川の瀬の激ちを見れば玉かも散りまがひたる〈散乱而在〉川の常かも　（万葉九・一六八五）

ケ阿保山の桜の花は今日もかも散りまがふらむ〈散乱〉見る人なしに　（万葉一〇・一八六七）

まず、カについては、間宮厚司［二〇一一］所収の【第16話「風尓乱而」の読み方】（一一八頁～）で、既に考察しているので、少々長くなるが、そこから引用し、以下に説明しよう。

この歌は、新日本古典文学大系『万葉集』（岩波書店）で、「梅の花が枝のあたりに散るのかと見るほどに、風に吹き乱されて雪が降ってくる」と現代語訳されています。

さて、ここで問題にしたいのは、傍線を付した第四句の原文「乱」字の読み方です。

万葉歌に見られる動詞マガフと、その名詞形マガヒの例を確認すると（すでに本書の第1話でも指摘しましたが、「梅の花散りまがひたる」（巻五・八三八）、「もみち葉の散りのまがひは」（巻一五・三七〇〇）、「降りまがふ雪につどへる」（巻三・二六二）などのように、マガフと歌われる対象は「花・葉・雪」に限定され、かつ「散る・降る」と必ず併用されているのです。

要するに、マガフの例には小片のものが散ったり、降ったりする例しかありません。問題の歌の第四句の原文「乱」字を、万葉集テキストは、すべてカゼニミダレテと読んでいます。それは次のように、風とミダル（乱）の語が一緒に使用されている万葉歌があるからなのかも知れません。

青柳の糸の細しさ春風に乱れぬい間に見せむ児もがも
（巻一〇・一八五一）

→青柳の枝垂れた枝の細く美しいことよ。春風に乱れてしまわない間に見せたい人がいたらなあ。

我がかざす柳の糸を吹き乱る風にか妹が梅の散るらむ
（巻一〇・一八五六）

→私が髪に挿している柳の糸を吹き乱す風で、いとしい妹の髪に挿してある梅も散っていることだろうか。

ミダルは、髪や柳など糸状の物が乱れる際に使用される動詞です。その点、右の二首は、乱れる対象が糸状の「柳の糸」なので、問題ありません。

しかし、冒頭の歌の場合は、「花…散る」「雪…降る」の文脈で、「乱」の対象は「花」や「雪」です。したがって、「風に乱れて」は、「風にまがひて」に改訓すべきだと考えます。

このように問題の「風尓乱而」を、カゼニマガヒテと訓じることに関しては、『春日政治著作集〈第五冊〉万葉片々』（勉誠社）所収「万葉集と古訓点」（一二九頁）にすでに指摘があります。筆者はその説に賛成です。ちなみに、平安時代の『古今和歌六帖』に見られる、次の「風にまがひて」の句は、ここで問題にしている「風尓乱而」の読み方を考える上で、非常に参考になります。なぜなら、問題の歌と共通する「風・雪・花・まがふ・降る」の語を読み込み、問題の歌と同じく、雪を花に見立てた内容になっているからです。

木の間より風にまがひて降る雪は春来るまでは花かとぞ見る
（古今六帖・七〇五）

以上で、引用を終える。次に、キの歌を新日本古典文学大系『万葉集』（岩波書店）は「散り乱れたる」と読むが、新編日本古典文学全集『万葉集』（小学館）や、それ以外の注釈書も「散り乱れたる」と読んでいる。歌意は、「川の瀬の激流を見ると玉が散っているのだろうか。それともこの景色は川のいつものことなのだろうか」で多数の小さい粒状の玉が空中を飛散している様を歌っている。ならば、「乱」の対象は「玉」であるが、

「花・葉・雪」と同様に捉えることができ、マガフで読む条件を満たしていると考えられよう（万葉歌に「散りまがひ」の確実な例はあるが、「散り乱れ」の確例はない）。

なお、キの歌には「泉河の辺にして間人宿祢の作りし歌二首」という題詞があり、次の歌（本稿の「一　ミダルと読む歌」の⑬）が、その第二首である。

⑬彦星のかざしの玉し妻恋に乱れにけらし〈乱祁良志〉この川の瀬に　（万葉九・一六八六）

こちらの⑬歌の場合には「散る」の語もなく、かざしの玉が妻恋のために乱れたので、マガフとは読めない。それは次の歌（本稿の「一　ミダルと読む歌」の④）も同じで、恋心や思いの乱れを表現する場合には、ミダルが適切な訓になっている。

④こもりくの泊瀬娘女が手に巻ける玉は乱れて〈玉者乱而〉ありと言はずやも　（万葉三・四二四）

右の歌の場合も「散る」という語が見えないので、「玉は乱れて」で問題ない。新編日本古典文学全集『万葉集』（小学館）の頭注には、「玉は魂を匂わし、その心が錯乱していることを暗示するか」とある。玉が乱れるという表現は、心（魂）が乱れることにつながる。

次いで、ケの歌の第四句は「散り乱るらむ」と読むテキストが目立つ。だが、ここは桜の花が散る様子を歌っている（花が乱れると歌う例はない）のであるから、新編日本古典文学全集『万葉集』（小学館）の「散りまがふらむ」の訓が適切である（「花が散りまがふ」の例はある）。ミダルの語義は、『時代別国語大辞典・上代編』（三省堂）に「柳・葦・こも・菅・稲・尾・髪・緒・解衣など、糸状をなすものについていうことが多い」という解説からも、ケを「散り乱るらむ」と読むのは桜の花は糸状でないので、不適切な読み方となろう。

以上、キ・ケの読み方に関しても、間宮厚司［二〇一一］の【第16話「風尓乱而」の読み方】で既に論じている。

三　サワクと読む歌

最後に、『万葉集』で〈乱〉字をサワクと読むべき歌であると筆者が考えた全歌A～Eの五首を、ここだけは通巻番号順でなく列挙し、考察したい。

A松浦船さわく堀江の〈乱穿江之〉水脈速み梶取る間なく思ほゆるかも　（万葉一二・三一七三）

B…朝雲に　鶴はさわき〈多頭羽乱〉夕霧に　かはづはさわく…　（万葉三・三二四）

C笹の葉はみ山もさやにさわけども〈乱友〉我は妹思ふ別れ来ぬれば　（万葉二・一三三）

Dもののふの八十をとめらが汲みさわく〈挹乱〉寺井の上の堅香子の花　（万葉十九・四一四三）

E引馬野ににほふ榛原入りさわき〈入乱〉衣にほはせ旅のしるしに　（万葉一・五七）

これらの中でAの歌だけが、これまでに〈乱〉字をサワクと読んでいる。これは賀茂真淵『万葉考』の説であり、各注釈書が揃って「サワクホリエノ」と読むとおり、特に問題はない。したがって、Aが万葉歌で〈乱〉字をサワクと読む重要な証左になる。このAのサワクは、新編日本古典文学全集『万葉集』〈小学館〉が頭注で、「この騒クは主として水手の声や動きを写したものであろう」と解説するように、大勢が声を上げて、動き回る様子を表しているのであろう。

Bについては、〈乱〉字の訓に問題がある山部赤人の長歌の〈多頭羽乱〉表記の句である。注釈書は揃って「鶴はみだれ」で別訓はない。しかし、ここは「鶴はさわき」と読むことを説いた、佐佐木隆［一九七六］が妥当と言えよう。その理由は、「鶴」を含む鳥類全般に関しては、サワクの例のみが見られ、ここだけが鳥類にミダルを用いた唯一の例外となっているからである。しかし、現状はBをサワキと読む万葉注釈書類は管見の限り見られず、ミダレの訓読のままである。その理由は恐らく、「…朝雲に鶴はさわき夕霧にかはづはさわく…」と読むと、対句表現で結びに同じ語を使う同様の例が万葉歌にあるのか、疑問が生じ、調査する必要があるからだろう。そこで、調べてみると、次のような長歌の例が存在する。

…国原は　煙立ち立つ〈煙立竜〉　海原は　かまめ立ち立つ〈加万目立多都〉…　（万葉一・二）
…春へには　花折りかざし〈花折挿頭〉　秋立てば　黄葉かざし〈黄葉挿頭〉…　（万葉二・一九六）
…国にあらば　父取り見まし〈父刀利美麻之〉家にあらば　母取り見まし〈母刀利美麻志〉…　（万葉五・八八六）
…上つ瀬に　斎杭を打ち〈伊杭乎打〉　下つ瀬に　真杭を打ち〈真杭乎捨〉…　（万葉一三・三二六三）
…朝なぎに　水手の声しつつ〈水手之音為乍〉　夕なぎに梶の音しつつ〈梶音為乍〉…　（万葉一三・三三三三）
…さひづるや　韓臼に搗き〈辛碓尓舂〉　庭に立つ　手臼に搗き〈手碓子尓舂〉…　（万葉一六・三八八六）
…上つ瀬に　打橋渡し〈宇知橋和多之〉　淀瀬には　浮き橋渡し〈宇枳橋和多之〉…　（万葉一七・三九〇七）

このような歌例を見ると、「立ち立つ」や「かざし」などのように同一語が同じ活用形になっているものが目立つので、Bは「鶴はさわき」でなく、「鶴はさわく」と読むべきなのかも知れないが、これについては、今後の課題としたい。

Cは、柿本人麻呂の屈指の名歌であるが、この歌の〈乱友〉の〈乱〉字にはミダル・サヤグ・サワク・マガフの四訓が、〈友〉字にはトモ・ドモの二訓が考えられる。それ故、第三句の訓義が定まらず、議論が絶えない。筆者の読みは、賀茂真淵が『万葉考』で唱えたサワケドモ〈真淵のサワゲドモをサワケドモに修正した〉説を支持する。根拠は以下のとおり。万葉歌で文中にトモ・ドモが使われた場合、逆接仮定条件の助詞トモは未定の事態を表す表現と、逆接確定条件の助詞ドモは既定の事態を

表す表現と、それぞれ呼応する。問題の歌は文末が「妹思ふ」で、現在のことを歌っている以上、〈友〉は既定の事態を表すドモのほうで訓む以外にない。このことによって〈乱友〉は、マガヘドモ・サヤゲドモ・サワケドモの三訓に絞られる。

ただし、マガフは専ら花や葉など、小片の散る動きを伴った場合に使用されているから、この歌には不適切である。サヤグは前句からの続きがサヤニサヤゲドモとなるが、こうした重複表現は他に類例がない。例えば、『新古今和歌集』の「み山もさやにうちそよぎ」（六一五番）ではサヤニサヤグの重複表現を回避している。それから、『万葉集』でサヤグは〈左夜芸〉（一三四番）と一字一音で表記されているので、〈乱〉字でサヤグを書くことは考えにくい。それに対して、サワクの訓は語法・表記・歌全体の解釈などから考量した結果、難点が一番少ない。サワクが否定される最大の理由は葉に対してサワクと表現した例が『万葉集』等の上代文献に見出せないからであるが、『古事記』の歌謡（六三番）に見られるサワサワは、大根の葉擦れの音を表したものである。なお、時代はくだるが、『夫木和歌抄』（一三一〇年頃成立）には「楢の葉さわぐ」が見られ、「葉→サワク」は決して不自然な主述関係でなく、意味的な不整合もない。総合的に判断して、サワケドモが最も合理的な読み方であると考えられる。詳細については一般読者向けに執筆した間宮厚司［二〇〇三］所収「第一章　人麻呂の「乱友」は諸説紛々」を御覧いただけるならば、幸いである。

Dは、万葉末期を代表する大伴家持が越中在任中に詠じた歌で、『万葉集』計四五〇〇余首中、ベスト百に選ばれる秀歌で、様々な視座から論じられてきた。新日本古典文学大系『万葉集』（岩波書店）は「（もののふの）たくさんの乙女らが入り乱れて汲みあう、お寺の井戸ばたのカタクリの花よ」と、現代語訳するが、他の注釈書類の訳を参照しても、大同小異で大差ない。

そもそも、奈良時代の『万葉集』は漢字ばかりで書かれていた。それが平安時代になって、ひらがなやカタカナによる読みが付けられるようになった。今日では歌を漢字ひらがな交じりで書くのが普通であるが、それは歌を読みやすくするために、万葉学者が研究して、書き直した結果に過ぎない。

ここで、Dの四一四三番歌を本来の書き方に戻せば、〈物部乃八十嫗嬬等之挹乱寺井之於乃堅香子之花〉と字間もない漢字の羅列になる。こうした万葉歌は平安時代に入ると難解で読みにくいものになっていた。そこで、九五一年に村上天皇が識者五人を招集し、万葉歌を解読するプロジェクトチームを結成。爾来、千年を超える膨大な研究の積み重ねの歴史がある。

にもかかわらず、未解決の問題は少なくない。現に万葉学者が漢字オンリーの歌を和語に還元する試みを長年にわたり行ってきたものの、読みの定まらぬ箇所は随所に存在し、課題が残る。実際に万葉テキストを複数見比べれば、それは一目瞭然だ。

D歌の第三句は〈挹乱〉表記であるが、その読み方は「汲みまがふ」で、テキスト間で完全に一致している。しかし、このマガフの訓には再考の余地があると思う。なぜならば、万葉歌に見られるマガフの実例をよく観察してみると、マガフものの

対象は「花・葉・雪・玉」に限られて、「散る・降る」と必ず併用されているからだ。つまり、問題の歌以外は小片のものが散ったり、降ったりする用例しか見出せない。そうすると乙女らが水を汲む姿を果たして、マガフと表現し得たか、甚だ疑わしい。

それでは、〈挹乱〉はどう読むべきか。『万葉集』には、〈乱〉字をサワク（万葉ではサワクと清音）に用いた先に示したAの「松浦船騒く堀江の〈乱穿江之〉」（三一七三番）があり、諸注釈書がサワクと読んで、特段問題はない。現在普通に書く〈騒〉字は万葉歌に使われず、サワクに当てる漢字は〈驟・驂・颯・動・乱〉等、何種類もあり、それほど固定的でなかった。

また、人にマガフを使用した例は皆無だが、サワクならば、「さわく御民」（五〇番）、「さわく舎人」（四七八番）、「さわく子どもを」（八九七番）、「船人さわく」（一二二八番）という人の例が見られる。中でも五〇番と四七八番は、「もののふの・八十・さわく」の語順で歌われ、この二首は人々が仕事に従事する様子を描写したもので、問題の歌も同じ構図だから、家持が作歌の際に参考にしたと推察される。古代和歌では先行する表現様式に従うのが望ましく、重視される伝統があった。そして家持には、その傾向が顕著との廣川晶輝［二〇〇三］等の研究報告もある。

以上から、〈挹乱〉はクミマガフからクミサワクに改訓するのが文脈上ふさわしい。「汲み騒く」ならば、春の訪れを喜ぶ乙女らが水を汲む生き生きとした動きと、賑やかに話す声の双方を表現できる。ちなみに、新編日本古典文学全集『万葉集』（小学館）は「汲みまがふ」を「汲みざざめく」と口語訳するが、マガフの語義と言えようか。サワク（騒）ならば、得心がゆく。筆者は二〇〇六年度・第五九回萬葉学会（日本女子大学）で、「家持のクミマガフ改訓」と題し、研究発表した。二年後、井手至・毛利正守　校注『新校注　萬葉集』（和泉古典叢書、二〇〇八年）に、クミサワクの訓が採用された。定訓と言えども、厳密な検討を経ずに、受け継がれているケースがまだあるかも知れない。

最後のEは、長忌寸奥麻呂の歌で題詞に「大宝二年に太上天皇（持統）が三河国に行幸された時の歌」と記されている。地名の「引馬野」は愛知県宝飯郡御津町御馬の引馬神社付近とする説等があるものの、所在未詳。「榛」は植物ハンノキ（榛の木）の古名で、樹皮・果実を古くは染料に使用した。問題の第三句〈入乱〉は旧日本古典文学大系『万葉集』（岩波書店）のみが「入り乱り」と読み、「引馬野に色づいている榛の原に入って、榛を乱して衣に美しい色をうつしなさい。旅行の記念に」と訳すが、ミダルを四段他動詞で、「榛を乱して衣に美しい色をうつしなさい」と解釈するのは不可解である。それ故、旧大系本『万葉集』以外は全て「入り乱れ」と読んでいるが、現代語訳を見ると「入り乱れて・入り交じって・分け入って・なだれ込み」など、注釈書間で様々である。そこで、間宮厚司［二〇一九］の中で「〈入乱〉は、現在「入り乱れ」と訓まれているが、ミダルは髪・柳など糸状のものや心が乱れる場合に使用されるの

で、旅人達が乱れるのか、疑問が残る。紙幅も尽きてきたので、ここを「入りさわき」と訓めるか否かは今後の課題としたい」と最後に記した。そして、間宮厚司［二〇二一］の【第21話「〈乱〉字をサワク（騒）と読む万葉歌は何首あるか】で考察した結果、〈入乱〉も定訓のイリミダレからイリサワキに改訓するのが穏当と判断した。以下、その結論に至った経緯について、根拠を提示しつつ、説明したい。

（1）万葉歌で人にサワク（騒）を用いた確例は次の四首あるが、ミダル（乱）には皆無である。

…玉藻なす　浮かべ流せれ　そを取ると　騒く〈散和久〉御民も…　（万葉一・五〇）
…五月蠅なす　騒く〈佐和久〉子どもを…　（万葉五・八九七）
葛飾の真間の浦廻を漕ぐ船の船人騒く〈佐和久〉波立つらしも　（万葉一四・三三四九）
…妹も兄も　若き子どもは　をちこちに　騒き〈佐和吉〉泣くらむ…　（万葉一七・三九六二）

なお、『古事記』の歌謡（七九番）の「……刈薦の乱れば乱れさ寝しさ寝てば」は人に使った例であるが、この「乱る」は二人の関係が破綻する意で、Eには適用できない「乱る」の例である。

（2）『新編国歌大観　CDROM版』（角川学芸出版）で「入り乱」と「入り騒」を検索した結果、Eの万葉歌と、それを踏襲・改作した歌を除けば、どちらの表現例もない。

（3）Eのような衣を染める場面で用いられたミダル（乱）の例は見られないが、サワグ（騒）のほうならば、「御紅染めは、打ち物などせし所の別当、大弐のおもと、蔵人より下仕へなどあり、いみじく物染め騒ぐ」（『うつほ物語』）がある。「たくさんのものを染めて大騒ぎをしている」と、大勢が声を立てて動く様子を「染め騒ぐ」と表現しているのは、Eの旅人一行が、衣を染める状況と相通じよう。

（4）サワク（騒）にはマイナス（不快）の印象のほうが、プラス（快）よりも強いようだが、万葉歌に「友の騒きに慰もる」（二五七一番）の「友達と騒いで気が晴れる」が見える。加えて、「院の内笑ひ騒ぎて」（『うつほ物語』）や「喜び騒ぐさまの」（『堤中納言物語』）というプラス（快）の例もある。また、『枕草子』に「莚道敷きたれど、みなおち入りさわぎつるは」（旧日本古典文学大系『枕草子・八段）がネガティブな場面で用いられ、「よろこび奏するこそをかしけれ。うしろをまかせて、御前の方に向かひて立てるを。拝し舞踏し、さわぐよ」（新編日本古典文学全集『枕草子』・九段）のほうがポジティブな場面で使用しており、双方存在している。

このような点を総合的に考慮すれば、（1）万葉歌で人にサワク（騒）を用いた用例はあるのに対して、ミダル（乱）にはない。（2）和歌に「入り乱」と「入り騒」のどちらの例もない。（3）E〈入乱〉の訓を考える際に『うつほ物語』の「染め騒ぐ」

は参考になる例である。（4）サワク（騒）のプラス（快）の例は、万葉歌にある。一方、ミダル（乱）のプラス（快）の例は万葉歌に見出せない。こうした事実から、Eの〈入乱〉は従来のイリミダレの訓ではなく、イリサワキに改訓するのが正しいのではないかと考えられる。

それから、佐佐木幸綱・復本一郎編『三省堂名歌名句事典』（三省堂）は、Eを「引馬野に美しく色づき映える榛（はんのき）の原、そこにわけ入って、衣を染めなさい。旅のしるしとして」と、口訳しているが、「乱れ」の語が何故か、訳出されていない。筆者の解釈はイリサワキと読み、「…その中に入って（さぁ、旅をする皆さん、楽しんで賑やかに）騒いで衣を染めなさい。…」になる。皆で旅先の思い出を作る場面で衣を染めようという文脈であるから、ミダレ（乱）よりもサワキ（騒）のほうが穏当である。大勢でワイワイと騒ぐ様子は、Dの春の訪れを喜ぶ乙女らが賑やかに水を汲む様子と通底する。そして、Dの「汲（く）み騒く」もEの「入（い）り騒き」という表現も、ここだけにしか見られない表現例である。

以上、A～Dに関しては間宮厚司［二〇一九］、Eについては間宮厚司［二〇二一］の【第21話「〈乱〉字をサワク（騒）と読む万葉歌は何首あるか】】の後半で考察した。

おわりに

ここでは、『万葉集』の全歌で〈乱〉字をミダルと読む歌は四一首（四二例）、マガフと読む歌は一〇首（一〇例）、サワクと読む歌は五首（五例）あるという結論になった。加えて、本稿の「はじめに」に書いた〈間乱〉をマユヒあるいはマヨヒと読む歌が一首（一例）あるので、〈乱〉字は計五八例になる。『万葉集』の訓読に関する問題意識は多様であるが、本稿のように〈乱〉字一字についても、まだ様々な考えがあることを理解していただけるならば、筆者としては幸いである。

参考文献

佐佐木隆［一九七六］「『万葉集』訓読の再検討」（『国文学解釈と鑑賞』第四一巻一〇号、至文堂）

廣川晶輝［二〇〇三］『万葉歌人 大伴家持―作品とその方法―』（北海道大学大学院文学研究科研究叢書2）

間宮厚司［二〇〇三］『万葉集の歌を推理する』（文春新書）

間宮厚司［二〇一一］『万葉異説』（森話社）

間宮厚司［二〇一九］「『万葉集』に〈乱〉字をサワク（騒）と訓む歌は何首あるか」（『季刊 文科』79秋季号）

間宮厚司［二〇二一］『万葉異説［増補版］』（森話社）